



新しい価値観を教えてくれた現場の仲間たちと過ごした2年間は、野崎さん個人の成長だけでなく、企業にとっても大きな財産になっている

ビジネスの海外展開を担う キーパーソンに

住宅メーカーの積水ハウス在職中、建築分野の青年海外協力隊員として、フィジーで2年間を過ごした野崎悦宏さん。その経験を生かして、現在、自社のビジネスを海外へ拡大させるため、世界各地を駆け巡る日々を送っている。

積水ハウス株式会社 国際事業部

野崎悦宏さん

隊員時代の経験が買われ
国際事業部に

飛行機を乗り継いで10時間以上、日本から約1万キロ離れた中東へ。積水ハウス株式会社に勤める野崎悦宏さんは、年中、出張で世界のあちこちを飛び回っている。2009年に新設されたばかりの国際事業部に籍を置く現在、最先端の環境技術を取り入れた住宅づくりやまちづくりを海外展開させることが彼の仕事だ。出張先では、試

作棟建設の監督として施工体制を検証したり、現地の工具や重機の有無、作業員の技術習得度、材料の調達方法などを調査したりと奔走する。
世界を舞台にビジネスを広げていくために必要な人材として抜擢された野崎さんは、青年海外協力隊OBだ。そもそも野崎さんが初めて協力隊を知ったのは、大学生のときに旅先のラオスで協力隊員と偶然知り合ったのがきっかけ。興味はあったものの、積水ハウ

出張先の現地作業員とともに、試作棟の建設現場で品質チェックを行う野崎さん



スに入社後は大阪府内の支店で現場監督を務め、気付けば10年が経過。あらためて振り返ってみたとき、「建築分野の中の住宅分野、その住宅分野の中のプレハブや鉄骨分野」と、自分の技術が非常に特化している」と思った。そこで脳裏をよぎったのが青年海外協力隊のこと。「自分の知識や技術が世界でどのレベルにあるのか知りたい、という思いと、自分の技術はきっと役に立つだろうと信じて、協力隊への参加を決意しました。」

会社が新設したボランティア休暇制度を利用し、晴れて04年から建築分野の隊員としてフィジーへ。かつて首都だった人口3000人程度の町レブカの役場に派遣され、ハード面ではマケットの建築や、教会など古い建築物の補修工事といった事業を町議会の協力を得ながら実施。ソフト面では、住民との交流会をはじめ、旅行組合や遺跡委員会などの団体が行う会議へ参加し、まちづくりに対する住民の意見に耳を傾けながら、20年にわたる町の基本計画の策定に携わった。
現地での苦労は挙げればきりがないが、特に赴任当初は自分がどのように周りの人々と人間関係を築けばいいのか分からず、活動の方向性を見いだすのが難しかったという野崎さん。

しかし半年が過ぎたころ、自分の能力を軸に考えるのではなく、現地のやり方を尊重し、「ここで自分に何ができるのか」へと方向転換するようになった。「実務を通じて互いを理解するには、自分が現地から学ぼうという姿勢が必要だと気付かされたのです。」

民間企業で必要とされる グローバル人材へ

協力隊の経験を通して得たものは大きかった。「世界にはいろいろな考え方があり、物事は多角的に見ることが大切だと知りました。そして、いったん日本の外に出たことで、より日本人というアイデンティティーを意識し、日本や会社、住む地域のことに興味をわき、強くかわっていきたいと感じるようになったのです。」

帰国後は再び現場監督として勤務していたが、2010年7月に国際事業部への異動を命ぜられる。フィジーから帰国した後、世界をフィールドに仕事をしたことより強く思うようになっていた野崎さんにとって、願ってもないチャンスだった。会社側も、まだスタートしたばかりの海外事業だからこそ、協力隊の経験で培った野崎さんの発想力や問題解決能力に大きな期待をかけているのだろう。
世界中のどこにしようというインターネットを通じて情報が瞬時につながる現代では、「自分とは違う新しいものを受け入れられる感受性の豊かな器とそれらを整



協力隊として活動したフィジーでは、ワーカーたちと相互理解を深めながら共に実務に携わった

理する引き出しが必要になる」と野崎さんは強調する。しかも、国と国、人と人とのつながりが強い今日の相互依存の社会では、自国の文化・伝統・歴史に精通し、かつ他国に興味を持ってかわらうとする姿勢が大切なのだ。

「民間企業では、会社の活性化を図る上でも、自社内を客観的に見られる視点を持ったグローバル人材の存在が求められている」と語る野崎さん。こうした人材を育成するための企業のバックアップは、後にその企業にとって新しい力となって返ってくる。積水ハウスが野崎さんの協力隊参加を後押ししたように、海外ビジネスの発展のためにもグローバル人材は今後ますます重要になっていく。